三八八号　平成二十六年十一月十日　――長崎歴文協短信――

ながさきの空

流転の蘭鉢について

永松　実

はじめに

中島川添いの中通りを上流に向って歩いて行くと中程の骨董店に白い楕円形の皿が目に付きました。このシンプルなオーバルプレートは、イングランド中部のスタッフォード州の窯で製作された物のようです。

この皿について店の女主人にたずねると、箱の蓋が残っているとのことで、見せて頂きました。それが思いもかけず、この皿の流転のドラマを知るきっかけとなりました。

蓋に記された情報

杉蓋の表に筆で「**蘭鉢**」、裏の中心に「安政六末年四月・長崎御用達従・小笠原善七郎到来」その左側に「明治廿六年六月廿三日・粟屋波江ヨリ買求稲葉」と墨書されていました。

蘭　鉢（33×44㎝）

蔵屋敷と長崎御用達

江戸時代の初期は、各藩の長崎出張所の各蔵屋敷は、町屋を借りて藩の者を置くか、屋敷は長崎の町人に管理させ、奉行所や藩との取り次ぎ等をしていました。

しかし、正保四年（１６４９）、ポルトガル船二艘が貿易再開を求めて来航して以来、西国諸藩から長崎への出陣があり、この事件を契機に各地諸藩の蔵屋敷が長崎に置かれることになりました。

江戸時代中期以降、佐賀、福岡等の九州六藩は聞役を長崎に常駐させ、特に鹿児島、島原などの八藩は五月中旬から九月下旬まで聞役を長崎に派遣しました。その他、佐伯、臼杵等の二十四藩は長崎用達町人の屋敷で事務を代行させました。

蔵屋敷の機能は、一．藩と奉行との間の政治的連絡。二．自国産品の販売と金銀調達など経済的側面。三．自国出身の旅人の掌握などが上げられています。

この蔵屋敷の業務を円滑に行なうため、蔵屋敷の物資調達や使い走り等あれこれの業務を代行してくれる町人を御用達といいました。彼等は長崎の有力町人で町の乙名や世襲も少なくなく、二藩かけ持ちの者もいました。

それでは、小笠原善七郎はどの藩の御用達だったでしょうか、嘉永五年（１８５２）「長崎諸役人帳」に小笠原甚四郎は臼杵藩、佐伯藩二つの藩の御用達と記されていました。

「桶屋町宗旨改踏絵帳」によると、茶屋吉左衛門が寛保四年（１７４４）に桶屋町に移住、安永八年（１７７９）六十七歳没、翌年吉次郎が吉左衛門と改名、文化十三年（１８１６）七十四歳没、前年大吉は甚四郎と改名し、弘化三年（１８４４）六十五歳没、巳之助は翌年甚四郎と改名していました。

両藩御用達は巳之助の祖父の代から勤めていました。同氏の家業は、米の販売と両替商でした。臼杵藩「御会所日記」の安政六年（１８５９）四月四日の条には長崎御用達小笠原甚四郎が病気のため用達の任務を勤めることが出来なくなり、息子寅之助に跡を継がせたいが、同人がまだ幼少のため甚四郎の弟の善七郎に後見をさせたいとの願書と切子銘酒瓶一対、大広幅御敷物地一枚を献上品として善七郎が持参し、臼杵へ来たとの記録がありました。同藩の用達は十人扶持、寅之助は幼少のため八人扶持で、当分の間善七郎が後見を勤める事になりました。また、佐伯藩「御用日記」同月十七日の条には臼杵藩の「御会所日記」と同様の記事があり、同藩「家中分限帳」には安政四年と元治元年（１８６４）に甚四郎、虎之助が共に三人扶持と記されていました。

これらの記録から小笠原善七郎は、臼杵、佐伯両藩の長崎御用達小笠原甚四郎の弟という事が判明しました。そして、この「蘭鉢」は善七郎が、両藩か、いずれかの藩にプレゼントしたものと推測されます。

その後、プレゼントされた蘭鉢は、粟屋波江の手に渡り、明治廿六年（１８９３）六月廿三日に稲葉氏が購入、それが、めぐりめぐって一五五年振りに長崎に帰って来たという事です。

ちなみに、この粟屋波江とは、徳山毛利家の「譜録粟屋浪江」によると、天保九年（１８３８）に御台所都合役を勤めていたと本人が嘉永二年（１８４９）に記しています。

おわりに

十九世紀のヨーロッパの陶磁器は銅版転写技法による装飾が盛んで、そのような中で本品の様にホワイトだけとは大変珍しい物でした。

器の底部にかすかに残る押印をオランダのアンティークマヨリカの社長に見ていただいた所、前記の同州で天保九年（１８３８）～明治二十一年（１８８８）の間に操業したダットソン窯と推定され、その生い立ちが分かりました。

かつて貿易都市長崎には、各地の国産品は元より、唐蘭の高価な舶来品も盛んに流通し中にはプレゼントに使用された品物も多かったことをこの「蘭鉢」の一例は、私に色々の事を教えてくれました。

（長崎市歴史民俗資料館館長）

風信

○長崎県下皆様方の御協力で「長崎がんばらんば国体」すべてが好調に終了されたとの事、本当に良かったですね。

○特に、天皇・皇后両陛下に御出席を戴いた開会式の朝は、早朝よりの風雨が止み「全てが無事に進行できました事は本当に幸運の至りでした。」と大会責任者の方が私に話して下さいました。

○十一月は「文化・勤労の月」であり「長崎国際観光コンベンション協会」では、恒例の市内史跡をさるく会として今年は十一月八日（土）午后、本年新らたに国指定重要文化財に指定された聖福寺を訪ねる事にした。寺院建造物の構成は黄檗風を主体とし、堂内の佛像の多くは唐船の人達により寄進された佛像が多いのが特長で、又寺内には市川団十郎供養碑、善男子八太郎墓碑、ジャガタラお春の碑、竜髪泉、惜字亭、鉄心椿他などがある。また、之の寺の座敷には坂本龍馬も来ていたそうである。

○伊良林地区民生委員高橋氏より同町の旧家田川家に多く古文書がある由との連絡あり、昨日田川登起子女史がわざわざ同文書を持参して下さった。同文書には鄭成功の母・田川氏の事、『長崎散使文書』、『振遠隊文書』等あり、本会古文書研究会で解読させて戴く事にした。

○先日、韓国放送局より来訪あり「最近、韓国では長崎チャンポンが多く評判になっているので、其のルーツについて調査にきたので御協力下さい」との事であった。「長崎チャンポン」の事については私は小論をまとめた事があり、其の資料をお渡ししたら大変よろこんで帰られた。

○長崎料理と言えば、其の翌日、「東京の家庭料理を楽しむ会」より「長崎シッポク料理について説明して下さい」との事。最近、「長崎の食文化」、なぜか全国的に有名になったようである。「ナガサキ国体のおかげですよ」と言われる。

今月ご寄贈いただいた書冊

○嘉勢照太氏より『長崎刺繍の煌めき』。長崎刺繍技芸の伝承者は嘉勢氏ただ一人であり、本書は嘉勢氏を中心に編集された貴重な美術資料である。（長崎文献社刊・四、五〇〇円）

○糸屋悦子女史より『樂25号』今回は長崎の洋風建築を中心に集録されたもので、新長崎観光資料としては楽しい本であった。（楽社刊一、〇〇〇円）

○長崎経済研究所より『ながさき経済10月』先月末・県下の求人倍率は上、生産面では公共工事等「持ち直し傾向、一服」とあった。

○『西日本文化№４７１』西日本文化協会（福岡）より、福岡県糸島半島（現糸島市）の歴史と自然の全（すべ）てにわたっての諸論考が古代の「伊都国」に始まり近世に至るまで良く収録されており、教授を受けるもの多く大いに参考となりました。

カット　中村　繁勝　なんばんえびす

長崎歴史文化協会研究室
TEL八二一一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F